甲子園短期大学紀要 No.27（2009）

保育者養成における表現関連科目の学習方法に関する一考察

安田　伸子*

A Study of the Methodology of Learning Expression in the Training course for Nursery Teachers

Nobuko YASUDA*

Ⅰ．はじめに

子どもは保育者の姿から多くのことを学ぶと言われている。幼稚園教育要領や保育所保育指針[1)]で述べられているように、子どもが感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して豊かな感性や表現する力を養い創造性を豊かにするためには、モデルとなる保育者自身も豊かな感性、表現力や創造性が備わっていることが大切である。短期大学の限られた時間の中で、保育者を目指す学生が効果的に表現関連科目を学ぶには、各学生が自分の実力を把握し、課題意識を持って学習に取り組まなければならない。そのためには自分の表現が相手の目にどう映っているか、また、実際に自分の思うような表現ができているか等を知ることが必要だろう。

自分の表現を客観的に見るにはビデオカメラで撮影し、その映像を確認する方法がある。授業の中で表現作品を発表する様子を撮影し、後日映像を見た後に自己や他者を評価することは、自分自身の現在の表現力を把握し、今後の自己課題をみつける手立てとなるのではないかと考える。

本研究では、自分が発表した直後の自己評価や他者の発表に対する直後の評価および感想と、改めて作品を映像で確認した後に行う評価の内容とを比較することで、それぞれの評価の間に違いが生じるのか、また評価に違いが生じた時に学生は何に気づき学ぶのか調査を行った。作品発表を撮影した映像を使用し、再評価する活動が表現関連科目の学習方法としてもつ効果の有無について考察することを目的とする。

作品発表では、子どもを対象とした文化財の一つであるペープサートを使用した劇を演じることを課題とし、6～7人のグループ毎に製作、発表することとした。ペープサート劇を演じるには、造形や音楽、言葉等、多くの表現が関連し、総合的な力が必要とされる。本学では「保育総合表現」という演習授業が行われており、ペープサート劇の制作を通じて保育者に必要とされる総合的な表現力の育成を目指している。また、学生主体のグループ活動を主としており、他学生との話し合いや練習を通して、コミュニケーション力を高めることも授業のねらいのひとつである。

＊　本学専任講師

Ⅱ．方法

（1） 対象者

本調査は「保育総合表現」の授業内課題の一部として行った。調査対象者は本学幼児教育保育学科Ⅰ回生44名である。

（2） 手順

①６～７名のグループ毎にペープサート劇を発表し、自分たちのグループの出番以外は観客として他のグループのペープサート劇を見る。

②自分たちが演じた直後に自己評価、他グループの劇を見た直後にその発表への評価を行う。

③発表の様子をビデオカメラで録画したものを２週間後に全員で観賞し、自分の演じた映像を見た後には自己評価を、他グループの映像を見た後にはそれに対する評価を行う。

（3） 発表作品

ペープサート劇の発表は、グループで選択した絵本を題材に、台詞や内容をアレンジし脚本化すること・演じる時間は10分程度・ふさわしい音楽（効果音を含む）をつけること・子どもの前で演じるのにふさわしい内容にすること等に注意し準備するよう指導した。各グループの演目は以下のとおりである。

１班（６名）「はらぺこあおむし」（エリック・カール作）

２班（７名）「はらぺこあおむし」（同上）

３班（７名）「ぐりとぐら」（中川李枝子作）

４班（６名）「３匹のこぶた」（イギリス民話）

５班（６名）「にじいろのさかな」（マーカス・フィスター作）

６班（６名）「おおきなかぶ」（トルストイ作）

７班（６名）「赤ずきんちゃん」（グリム童話）

（4） 調査内容

①質問１

表１に記してある「派手な - 地味な」や「力強い - 弱々しい」等の24項目の形容詞対を印象評価項目として用い、５段階（左側の形容詞の印象が強ければ１、右側の印象が強ければ５）で評価した。

表１　印象評価項目　（質問１）

番号	項　目	番号	項　目
1	派手な - 地味な	13	綺麗な - 汚い
2	力強い - 弱々しい	14	奥行きのある - 奥行きのない
3	上品な - 下品な	15	整った - 雑な
4	生き生きした - 生気のない	16	積極的な - 消極的な
5	美しい - みにくい	17	易しい - 難しい
6	好き - きらい	18	長い - 短い
7	親しみやすい - 親しみにくい	19	優れた - 劣った
8	明るい - 暗い	20	重みのある - 軽い
9	楽しい - つまらない	21	大きい - 小さい
10	満足な - 不満な	22	温かい - 冷たい
11	深い - 浅い	23	動きが多い - 動きの少ない
12	軟らかい - 硬い	24	速い - 遅い

②質問２

表２に記してある「セリフの声量がそれぞれの場面に適切であった」や「場面にふさわしい音楽（音）が使われていた」等の12項目について、５段階（５．非常にあてはまる、４．少しあてはまる、３．どちらでもない、２．あまりあてはまらない、１．全くあてはまらない）で評価した。

表２　評価項目（質問２）

番号	項　目
1	セリフの声量がそれぞれの場面に適切であった
2	何を言っているのか言葉がはっきりと聞き取れた
3	場面によってセリフを話すスピードが適切であった
4	登場人物によって声が変化していた
5	登場人物の感情によって声が変化していた
6	セリフを話すタイミングはちょうどよかった
7	セリフとペープサートの動きは合っていた
8	全体的にセリフが棒読みであった
9	ペープサートを見てすぐに登場人物がわかった
10	全体的にペープサートの動きに工夫がみられた
11	場面にふさわしい音楽（音）が使われていた
12	演じる時間（長さ）はちょうど良かった

③質問３

表３に記してある「最後まで集中して見る（演じる）ことができた」や「よく練習されていた（練習した）と思う」等の９項目について５段階（質問２と同じ）で評価した。

表３　評価項目（質問３）

番号	項　目
1	最後まで集中して見る（演じる）ことができた
2	見て（演じて）いる途中で飽きてしまった
3	見て（演じて）いて楽しかった
4	この劇を見ると子どもは喜ぶと思う
5	この劇を子どもは最後まで一生懸命見ると思う
6	授業で習ったことが生かされていた
7	よく練習されていた（した）と思う
8	授業で習ったこと以外の工夫がみられた
9	この劇を実際に子どもに見てもらいたい

自分が演じた直後に自分について評価したものを自己評価、他のグループの発表を実際に見た直後にそれを評価したものを他者評価、２週間後に自分の作品を映像で観賞し自己評価をしたものを映像自己評価、２週間後に他のグループの映像を観賞し評価したものを映像他者評価と呼ぶことにする。また、それぞれを評価すると同時に自由に感想を記述させた。

演目によって物語や登場人物の性格が違うことから受ける印象の違いや、表現することに対するモチベーションの個人差を考慮して、本調査では班ごとに平均値を出すことにした。それぞれの質問項目の平均値を出し、自己評価、他者評価、映像自己評価、映像他者評価とで比較する。統計処理は解析ソフトSPSS v17を用いた。

Ⅲ．結果

各班のそれぞれの評価の得点に有意な差が認められた項目について述べる。

（１）質問１

発表作品に対する形容詞による印象評価得点を表４に示す。

表４．質問１で有意差のみられた項目

演目	項目	実演		映像	
		自己	他者	自己	他者
はらぺこあおむし（1班）	満足な - 不満な	2.67	2.97	3.33	2.14
にじいろのさかな（5班）	動きが多い - 動きの少ない	2.50	2.54	4.33	2.47
	速い - 遅い	2.17	2.84	2.94	3.00
おおきなかぶ（6班）	派手な - 地味な	3.00	2.08	3.50	2.08
	力強い - 弱々しい	2.50	1.73	3.17	1.65
	生き生きとした - 生気のない	1.67	1.57	2.67	1.49
	楽しい - つまらない	1.83	1.46	2.33	1.35
	深い - 浅い	3.17	2.41	3.83	2.73
赤ずきんちゃん（7班）	力強い - 弱々しい	1.83	1.19	2.00	1.19
	優れた - 劣った	2.83	1.59	2.67	1.67

「はらぺこあおむし（１班）」は発表直後の自己評価も他者評価も作品発表について満足していたが、映像を見た後の本人たちは不満だと感じた（図１-１）。

「にじいろのさかな」は演じた直後の自己評価では他者と同様に少し動きが多い印象であったが、映像を見た後では逆に動きが少ないと感じるようになった（図１-２）。

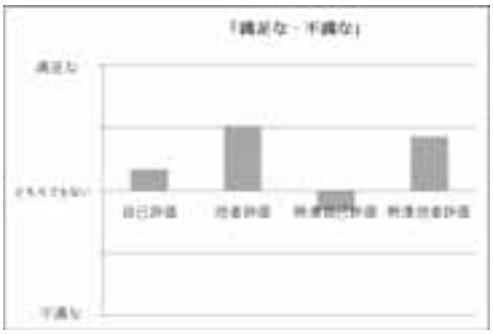

図１-１.各評価における平均値 はらぺこあおむし

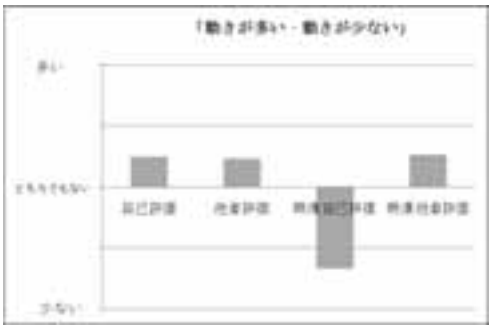

図１-２.各評価における平均値 にじいろのさかな

速さに関しての自己評価では他者がもった印象よりも速いと感じていたが、映像を見た後は他者評価とほぼ同様に、速いとも遅いとも言えない値になった。

「大きなかぶ」では「派手な - 地味な」「力強い - 弱々しい」「生き生きとした - 生気のない」「楽しい - つまらない」「深い - 浅い」の５項目で差がみられた。それぞれに他者からの評価よりも自己評価の方が否定的な印象であり、ここでも映像観賞後に特にその傾向が強まっている。中でも派手さと力強さの項目をみると、派手でも地味でもなく、やや力強いと自分たちで感じていたのが、映像を確認すると少し地味で弱々しいという否定的な印象になった。

また、「赤ずきんちゃん」も力強さと優劣の両項目において他者からの評価より自分自身の評価の方が否定的な印象であった。

以上のように質問１では、有意差のみられた項目のうち１項目以外全てにおいて映像を見た後の自己評価が映像を見る前の自己評価よりも否定的な印象へ近づき、中には逆の印象にまで変化している項目があることが明らかとなった。

（２）質問２

各班の作品発表での台詞や音楽に関する印象得点を表５に示す。

「はらぺこあおむし（１班）」は他者からそう思われていないにもかかわらず、映像を確認すると自分たちでは台詞が棒読みであったと感じた。演じる時間（長さ）も他者からは良い評価を得ているが、自分たちではあまり良くなかったと評価した。

「はらぺこあおむし（２班）」は改めて映像を確認することで自己、他者共にうまく台詞が言えていたと感じた。

「３匹のこぶた」は実演直後に自分たちでは台詞を話すタイミングが良かったとも悪かったとも判断できていないが、映像を観察すると他者からの評価と同様に良かったと評価した。逆に「にじいろのさかな」は演じた直後は自分たちで何となく台詞とペープサートの動きは合っていたと感じていたが、映像を見てそうでもなかったと気づいた。

「大きなかぶ」ではビデオを見ることによって、自分たちが思っていたよりも役柄ごとに声を変化できたが、ふさわしい音楽（音）はあまり使われていなかったことを確認した。

「赤ずきんちゃん」では声量、言葉の明瞭さや役ごとの声といった台詞に関する項目で他者からかなり高い評価を得た。演目の長さを含め、本人たちも良かったと判断しているが、映像による確認後に、できたという気持ちがさらに強まった。

表５．質問２で有意差のみられた項目

演目	項目	実演		映像	
		自己	他者	自己	他者
はらぺこあおむし（1班）	全体的にセリフが棒読みであった	3.17	2.43	3.67	2.08
	演じる時間（長さ）はちょうど良かった	3.00	4.24	2.33	4.28
はらぺこあおむし（2班）	全体的にセリフが棒読みであった	2.86	2.47	1.67	1.72
3匹のこぶた（4班）	セリフを話すタイミングはちょうどよかった	3.17	4.14	4.00	4.32
にじいろのさかな（5班）	セリフとペープサートの動きは合っていた	3.33	4.11	2.67	4.14
おおきなかぶ（6班）	登場人物によって声が変化していた	4.17	4.73	4.83	4.89
	場面にふさわしい音楽（音）が使われていた	3.67	3.97	2.33	3.97
赤ずきんちゃん（7班）	セリフの声量がそれぞれの場面に適切であった	4.00	4.92	4.33	4.83
	何を言っているのか言葉がはっきりと聞き取れた	3.50	4.89	4.33	4.86
	場面によってセリフを話すスピードが適切であった	3.50	3.83	4.54	4.69
	登場人物によって声が変化していた	4.17	4.92	4.83	4.97
	演じる時間（長さ）はちょうど良かった	3.50	4.51	4.00	4.58

（３）質問３

各班の作品発表を評価した得点を表６に示す。

「はらぺこあおむし（１班）」は他者からの評価は悪くなかったにもかかわらず、自分たちの映像を見て練習不足と感じ、やや飽きてしまった。

「はらぺこあおむし（２班）」は実際に自分

たちで発表するよりもビデオを見た時の方が集中できたと感じ、他者評価とほぼ同じ評価になった。

表６．質問３で有意差のみられた項目

演目	項目	実演		映像	
		自己	他者	自己	他者
はらぺこあおむし（1班）	見て（演じて）いる途中で飽きてしまった	2.83	1.95	3.50	1.67
	よく練習されていた（した）と思う	3.00	4.11	2.17	3.94
はらぺこあおむし（2班）	最後まで集中して見る（演じる）ことができた	4.14	4.67	4.83	4.86
	見て（演じて）いる途中で飽きてしまった	1.43	2.06	1.67	1.36
3匹のこぶた（4班）	この劇を子どもは最後まで一生懸命見ると思う	3.50	4.73	3.80	4.47
	この劇を実際に子どもに見てもらいたい	3.67	4.65	4.20	4.47
にじいろのさかな（5班）	見て（演じて）いて楽しかった	4.83	4.30	3.50	4.28
おおきなかぶ（6班）	この劇を見ると子どもは喜ぶと思う	4.00	4.68	4.17	4.76
	この劇を子どもは最後まで一生懸命見ると思う	3.67	4.68	3.83	4.59
	よく練習されていた（した）と思う	3.33	4.22	2.83	4.38
赤ずきんちゃん（7班）	最後まで集中して見る（演じる）ことができた	4.00	4.68	4.17	4.76
	この劇を子どもは最後まで一生懸命見ると思う	3.67	4.68	3.83	4.59
	よく練習されていた（した）と思う	3.33	4.22	2.83	4.38

「３匹のこぶた」は自分たちの劇を子どもに見てもらいたいと思った。また、子どもはこの劇を一生懸命見てくれるかという項目に対して、他者が高く評価していたのに比べ自己評価はそれほど高くなかったが、映像を見ることでその得点が増加していた。

「にじいろのさかな」は他者から楽しかったと評価された。自分たちも演じた直後はそう感じていたが、ビデオを見てみると楽しかったという気持ちが薄れた。

「大きなかぶ」では他の学生からは練習が十分にできており、子どもは喜んで最後まで見るだろうと評価された。しかし、本人たちは映像を見ると練習不足であったと感じ、他者評価との差が広がった。

「赤ずきんちゃん」を他者はよく練習された発表であったと評価したが、映像を自分たちで確認すると実演直後に感じたよりは練習できていなかったと評価した。そして、作品発表はかなり集中して演じたが、ビデオを見た時の本人たちの集中は少し弱まった。また、子どもは最後までこの作品を一生懸命見るだろうと思っているが、自己評価は他者が感じたほど高い値ではなかった。

（４）自由記述

自分が実際に演じた直後と、その映像を見た後の記述内容をみると、実演直後は44名中14名が「楽しかった」と記述したのに対し、映像観賞後は全く「楽しかった」の記述はなく、「面白い作品になった」と述べたのは１名のみであった。ペープサートの動きの乏しさや、台詞と動きのタイミングの悪さを挙げた学生は実演直後が４名、映像を見た後は15名であった。大きさやバランス等、ペープサートの製作に関する反省を挙げた者が、０名から11名になった。また、練習不足と感じたのは実演直後の１名から映像観賞後は６名に増加した。その他の主な内容は台詞の声量や速さに関する反省、音楽で使用したピアノ演奏の技術的な問題や音量のバランスについての反省等があった。

次に一人ひとりの記述内容から変化の有無をみると、例えばある学生は自分が演じた直後に「練習よりも大きな声だった」「声の変化ができた」「大成功」と記述したが、映像で自分たちの発表を見た後は「自分では声量は良いと思っていたが、実際はそうでもなかった」「感情がこもっていなくて残念」「動きの工夫を考えたかった」と変化していた。

また、反省以外に「一つのペープサートを通して、友達とより深く関係がもてて良かった」や「（ビデオによって）気づいたことを忘れず、次にペープサートの劇をする機会があればそのことに注意してやりたい」「改めてビデオを見てみると違うと思った。見て勉強になった」「今後に生かしたい」等があった。

Ⅳ．考察

質問１と２において有意な差が認められた多くの項目で、映像自己評価が自己評価よりも否定的になった。例えば「はらぺこあおむし」を演じた１班は、演じる長さの項目で他者から良い評価を得ているが、自分たちは「セリフを話すスピードが速いように」感じ、「（演じる）時間が短かった」と評価した。中には「にじいろのさかな」で「主人公をもっと動かして元気に活発にすれば良かった」「あまり動いていなかった」と自由記述された動きの多少に関する項目のように、評価が全く逆転している項目もみられた。「ぐりとぐら」を演じた学生の評価得点では一項目も有意な差が認められなかったことから、この班のみが常に客観的な自己評価をしていたと推測される。しかし、他のほとんどの学生においては、作品発表をした直後は主観的な自分の思いや表現意欲を含んだ自己評価になり、ある程度は自分の思いどおりに演じることができたと感じたが、後に改めて映像で見ると自分が思ったように表現できていなかったことに気付き、評価が下がったと考えられる。一方で「にじいろのさかな」のように、速さの項目で演じた学生の一人が「途中早口になったのが残念だった」と記述したように、実演直後の自己評価だけは速いと感じたが、ビデオ観賞後は他者評価とほぼ同様の値になっている班もある。演じた直後の低すぎた自己評価が、映像による確認をしたことで客観的に自分たちの良さを評価できるようになっており、録画映像を使用した効果があったことを示しているといえるだろう。

また、目立ったのは自分たちが演じて楽しいと感じることと、見る人が楽しいと感じることとの間に差があった点である。質問１の「大きなかぶ」や質問３の「にじいろのさかな」の結果では、最も低く評価された映像自己評価でも少し楽しい寄りではあるものの、自分が演じた直後に感じた楽しさは、客観的にみると思っていたよりも少なかったと感じた。この感じ方の変化は自由記述で14名が実演直後に「（演じて）楽しかった」と述べたにもかかわらず、映像を見た後はこれに関する記述がないことからも確認される。

練習量に関しては「練習不足でペープサートを登場させる時にもたついた」「自分たちが必死なのがわかった」との記述があり、有意差のあった全ての班において映像自己評価が最も低くなっている。改めて映像を見ること自分たちが思うよりも、発表準備や練習が不十分であったと感じているようである。

このように発表直後の反省会や感想文などでの振り返りに止まらずに、後日に録画映像を用いたり、他者への評価を同時に行ったりすることは、今の自分に出来ていないこと、足りないもの、または出来ていることを自覚させ、客観的な自己評価を持たせるためにも有効であると推察された。

全体的にみるとそれぞれの評価項目において自分に対する評価が低く、他者から受ける評価の方が肯定的である傾向があった。また、映像を見て必要以上に自己反省している場合も多い。例えば「にじいろのさかな」の「見て（演じて）いて楽しかった」の結果によると、他者は常に楽しかったと感じており、自分たちも演じて楽しかったと感じていたにもかかわらず、映像で作品を見てみると楽しくなかったと評価していた。映像を見て様々な点を反省することによって、自分たちが表現した作品や準備過程を低く評価しすぎるようになる危険性も考えられた。表現関連科目の指導をする際には、録画映像を見ることによって自主的な気づきを促す

だけでなく、他者からの肯定的な評価を知らせ、表現することに対する自信をもたせることも重要だろう。

自由記述からは、多くの学生が演じる際の台詞とペープサートの動きに関することや、製作、音楽のバランスに対する課題意識をもったことが分かった。作品を発表して完結するのではなく、作品を改めて客観視することで、作品を創る上で必要なものを考える機会となった。また、「（ビデオを見て）気づいたことを忘れず、ペープサートの劇をする機会があればそのことに注意してやりたいと思った」「今後に生かしたい」と記述しており、今回の取り組みによって何らかの自己課題を見つけると同時に、次への学習意欲が高まっていることが分かる。反省しながらも自分にできたことを確認し「この班で劇ができて良かった」と記述したように、学生がお互いに協力して一つの物を作り上げる喜びや満足感を得たことからは、授業のねらいの一つであったコミュニケーション力や協調性を育てる可能性があることが推測できた。

本調査の結果、作品発表のように自分の表現している様子を撮影した映像を使用し再評価する活動が、学生の客観的な自己評価を可能にし、表現関連科目の学習方法として一定の効果をもつことが明らかとなった。今後は、これらの学生の気づきを基に、それぞれ自らがより具体的な目標を設定し今後の学習へ繋げるよう、学習方法の検討を続けたい。

文献

1）2008（平成20年）版　幼稚園教育要領・保育所保育指針．萌文書林、2008.

2）花原幹夫編著：保育内容表現．北大路書房、2005.

3）竹村壽美子：保育における表現の問題 - 「表現活動：音楽」の実践を通して - . 四天王寺国際仏教大学紀要　第44号、2007.

4）若杉雅夫、篠田美里：総合表現の一考察 - ペープサート劇創作について - . 東海女子短期大学紀要　第26号、2000.

5）井戸裕子：保育内容「表現」における教材研究：紙芝居・パネルシアター・ペープサートを作って、演じて（Ⅰ）．日本保育学会大会研究論文集 No. 54、2001.

6）井戸裕子：保育内容「表現」における教材研究：紙芝居・パネルシアター・ペープサートを作って、演じて（Ⅱ）．日本保育学会大会研究論文集 No. 55、2002.

7）井戸裕子：保育内容「表現」における教材研究：紙芝居・パネルシアター・ペープサートを作って、演じて（Ⅲ）．日本保育学会大会研究論文集 No. 56、2003.

8）井戸裕子：保育内容「表現」における教材研究：紙芝居・パネルシアター・ペープサートを作って、演じて（Ⅳ）．日本保育学会大会研究論文集 No. 57、2004.